
魔法世界の混沌

逸環

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界の混沌

【Nコード】

N7191X

【作者名】

逸環

【あらすじ】

多くの人のように、ただ毎日を生きるだけの主人公。

彼が死んだ時に現れた神が与えた能力は、月姫の混沌教授とFat eの鉛色の狂戦士のもので……………。

能力が片方マイナーすぎる！

とかの苦情は聞き入れないで、生き汚い主人公が頑張ります！

なんでかなあ？(前書き)

初めて投稿します。

なんでかなあ？

思えば、俺の人生は散々だった。

いや、散々ではない。

無為だったただけだ。

生きているとも言えず、死んでいないだけの毎日。

普通に学校に行つて、普通に部活をやり、普通に帰つて、普通に遊ぶ。

その繰り返し。

え？

勉強しろよつて？

無理無理。

俺の辞書に勉強なんて言葉は載っていない。

今の高校に入れたのも、奇跡が五回くらい起きたからだし、講義なんて睡眠時間になっている。

善人でもないから、道で困っている婆さんを見ても助けないし、目の前で子供がトラックに轢かれそうになつても見ているだけ。

……………そのつもりだったんだがなあ。

なんで、あのガキを助けちまったかなあ？

良心なんて咎めていない。

そんな心は持っていない。

ああ、わかってんよ。そんなデメエが、

「ムカつくからだ。こんちきしょー」

死にたくねえなあ。

「ああ、ムカツク」

何もない、ただ広いだけの空間で呟く。
思い出すことは、生前最後の記憶。

そう。

ガラにもなくトラックに轢かれそうになったガキを助けてしまった
時の記憶だ。

「ああ、ムカツク」

もう何度目かも分からない言葉を呟く。
どれだけ時間が経ったかも分からない。

延々と呟き、うずくまり、呟き、立ち上がり、呟き、横になり、と
りあえず寝る。

その繰り返し。

ここがどういうところかは分かっている。
俺みたいなの、死んでからもまだ馬鹿みたいに生きてがっている連中
を諦めさせるための場だ。

「ああ、ムカつく」

こんな何も無い空間。

寂しくて、狂いたくて、そして死にたくなってくる。

けれど、

「死にたくねえなあ」

生前、俺は生きていたとは言えなかった。

ただ、情性に流されていただけ。

生きてすらいなかったというのに、なぜ死にたいと思えるのか。

「生きたい。生きて生きて生きて、そして逝きたい」

こんな何も無い空間でも色褪せることなく、より彩度を増す想い。

「まだ生きてねえのに、死ねるわけねえだろっつー!!!」

「強情なやつじゃのう。とっとと死んで楽になればいいものを」

「……………あ？」

なんか、明らかにツラをかぶった爺がすぐ横にいた。

「いつの間だ?」

生きたい。

「いつの間になって、お主がぶつぶつ言い始めたときからじゃけど」

「え？」

「てことはなんだ？」

「俺はずっとぶつぶつ呟いているところを見られていたのか？」

「恥っず！」

「俺恥っず！」

「まあ、お主が恥ずかしいとかは割りとどろでもいいんじゃないよ」

「よくねーよ」

「いや、マジで。」

「もう分かっているとは思いますが、わしは神じゃ。神には、いつまでも死にきらないでウダウダしている魂をあの手と送る役目がある」

「ほっ？」

「お主は先ほど、『まだ生きてねえのに、死ねるわけねえだろうっ！……！』とか言っておったがのう。しかし、確かにお主は、『生

きて』、『死んだ』んじゃよ。命は一人に一つ。これが鉄則じゃ

」

.....。

「第一、最近の人間たちは命を軽く見すぎておる。ただ毎日を漫然と生きおってからに」

「.....がれ」

「せつかくの命がこれでは無意味。お主もその例に漏れない」

「.....がれ」

「分かったら早く黙りやがれヅラ爺いいつつつつつ.....!!!!!!」

「.....! ほっ?!」

爺の胸倉を掴み、叫ぶ。

「さっきから聞いてりゃあ偉そうに」

「いや、実際偉いんじゃないけど。っーかヅラて」

「黙れ。そりゃああんたの言つとおり、俺は毎日毎日ただ生きていただけだよ。でもなあ、それじゃあ『生きて』ねえんだよ」

「むう」

「けどよあ、そんな自分にムカついて、イラついて、変わりたいと思っただら死んじまうしよあ……………ヒック……………。俺、どうすりゃあズズツいいんだよあ……………」

言葉とともに、涙と嗚咽が漏れる。

「……………お主は、後悔してるのか？」

「ヒック……………当たり前だ……………」

じゃなかったら、『生きたい』なんて思わない。

「ふむ。ならばお主、『魔法先生ネギま！』の世界へ行ってみんか？」

「……………は？」

……………何のことだか分からん。

「お主は自分を変え、『生きる理由』が欲しいのじゃろっ？ならばこのまま生き返らず、命の危機が多い世界のほうがよいのでは？」

「いや、まあそりゃあな、平和な世界で生きる理由を見出せつたって難しいだろうけど」

「大丈夫。すぐに死んでしまったら仕方ないから、死にづらいようにするからのお」

「え？いや、ちょ？」

あの？

勝手に話が進んでいるんですが？

「では行くがよい！汝の人生に、幸多からんことを！」

「ちょっとおおっつっ?!」

そこで俺の意識は途絶えた。

「……………んあ？」

意識を取り戻すと、俺は森の中で倒れていた。

【無事に転送が成功したようなので、能力の開示をします】

「は？」

頭の中に、機械的な声と文章が流れてくる。

【能力1・獣王の巢

混沌の固有結界。

原点は月姫に登場したネロ・カオス。

666の生命の因子が混濁し渦を巻く混沌の世界。

内部の生命因子を使い魔の如く使役する。その形状は現界の瞬間に決定しているため、何が出るかは本人にもわからない。しかし、幻想種や小動物といった強弱、種類など、ある程度の決定はできる。

666という数はあくまで「因子」であり、それをもって小規模な生命の系統樹を再現しているため、現れる生物の「種類」は666という数以上のもつと多数にわたる（例えば、因子を2つ以上用いた獣を作ること可能ということ）。

666の使い魔で武装している、などとも言われるが、獣は発動者と同じであり同位。本来従者である使い魔が、発動者と同格、発動者「使い魔」という存在にもなっている。

普通に殺されても混沌に戻るだけで獣の因子そのものは失われず、発動者の体に戻せばまた復活する。このため、殺すには666の生命因子全てを一気に葬る必要がある。混沌の性質上、それは非常に困難。

自身の体内を固有結界としているため、抑止力による修正を受けないという特性がある。

能力2・十二の試練^{【トット・ハンズ】}

ランクB以下の攻撃をシャットアウトしてしまう上、11の代替生命ストックがある。さらに一度受けた殺害方法では二度と殺せないで、本気で倒すにはAランク以上の攻撃かつ12通りの方法で殺さなければならぬ。(しかし、オーバーキル級のダメージを受けるとダメージ分の生命ストックを消費するようで、この通りにはならない)

あなたの能力は以上です。それでは、あなたの生が良きものである【ことを】

「……………はあ?!」

生きたいって言ったけど。

.....これはない。

下手な不死より性質が悪いじゃないか。

細胞一つ残らず消し飛んだら終わり、とかいう魔人を超えたぞ。

「しかも、時間が経ちすぎたらただの混沌になるというタイムリミット付」

獣王の巢の副作用的なやつがネックだ。

数百年かかるが、徐々に自我が薄れていき、最終的にはただの混沌となる。

可及的速やかに、できれば百年以内にこの問題を片付けなければおちおち眠ることもできん。

あれは確か、666の獣の因子を人の身に内包した結果起こる弊害だろ？

だったら、人外の体を手に入れるか、その因子全てに『俺』という一つ概念を与えるかで解決できるんじゃないか？

前者ならば、ここがネギま！の世界であるならば真祖となる術式が存在するらしいし、因子を浸食するくらいの力が必要な後者に比べ現実的か？

.....いやいや。

これで真祖になってみる。

ただでさえ死に辛いものにもはや不死だろう。
そこまでは求めていないぞ。

「結局、どつすりゃあいいのやら」

「身包み全部置いていきゃあ良いのさ」

「……………え？」

考えていたら、後ろに誰か来ていたけど、

「……………誰？」

「誰って盗賊だよ」

「……………」

「おい。しっかりしろー」

……………。

「え？」

「ためた拳銃に出てきたリアクションが「え？」ておい。もっとな
んかねえのかよ？」

「あるわけねえだろうが。バカヤロー」

「よし良い度胸だ。殺して身包み剥いでく」

やっちまった。

つーか盗賊で、ここは魔法世界か？

旧世界（この言い方あまり好きになれない）なら盗賊なんて商売にならないし。

まあ、十二の試練のおかげで、大概の攻撃なら無傷だろうが。

「死ねえ！」

自称盗賊が鉈で斬りかかってくる。

.....鉈？

魔法使いじゃ《ガキイインツッ！》ないの？

「.....おい、お前」

「何だよ盗賊」

「.....何で刃が通らない？」

「魔法」

どうせ説明しても分からないだろうし、だったら魔法とでも言っておけば良い。

………驚いた盗賊のアホ面が最高だ。
ブフォッ！！（吹）

真相に驚いた。

「……………笑うなや」

「ぷぷっ……………無理……………ブフッ！」

「笑うなっただよおおお！！大体魔法って何だ！？泣くぞこんと
「チヨイ待った」おおう？なんだよ？」

えつと。

あれ？

魔法を知らない+描写は無かったけどこの「いかにも中世欧州です」
って格好は……………？

「質問1・魔法を知らない？」

「当たり前だろう。あんな異端な力」

「質問2・この世界って魔法世界じゃない？」

「なんだそりゃ？」

「……………」

「……………」

……え？

「ウソオオオツツツ?!」

「ホントオオオツツツ!!」

あ、この人ノリいいわ。

このテンションに着いてきてくれる。

まあ、ただの馬鹿とも言うが。

「とりあえず質問を続けよう」

「え？俺いい加減お前から略奪しないと」「質問3」「無視かよ」

勿論だ。

さあいくぞ。

「今、西暦何年？」

「学がねえから知らねえ」

「……………」

「.....」

いや待て、待つんだ俺。

むしろチャンスだ。

西暦を知らないやつが現代欧州にいるわけが無い。

これで旧世界（やっぱり好きになれない）だということ、今がおそらく中世欧州ということを確認できたぞ！

「あゝ、参考になるかもしれないから言っておくが、7年前にヘンリー5世様が亡くなられたぞ？」

.....ヘンリー5世？

「百年戦争おおっつっつ?!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7191x/>

魔法世界の混沌

2011年10月30日03時17分発行